

小池宏明 牧師

*パリサイ人、律法学者たちの形式的信仰

今日は、イエス様から、あなたの信仰は立派です、と認められたカナン人の母親に目を留める。そもそも立派な信仰とは何だろうか？ 1-20 節のユダヤ人指導者たちの信仰と対比して、この女性の信仰姿勢に注目したい。ユダヤ人指導者たちの問題点は、人の言葉に従った形だけの信仰に陥っていることだ。イエス様は、そのことをはっきりと指摘している。

*異邦の地でカナン人の母の主肉に肉薄する信仰

あるカナン人の女性が、イエス様の元に訪ねて来て、22 節「・・・、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けた。」

異邦人なのに、イエス様が「ダビデの子」、「救い主」、「メシヤ」であることを知っていた。何とか娘を助けたいという母親の強い愛情が、いろいろな情報を集めることになったのだろう。そして、信仰の告白に結びついた。本気で求める人には、イエスが誰なのか！分かるのだ。民族の違いは関係ない。彼女がこんなにも熱心に叫び続けているのに、イエス様は沈黙する。しかし、カナン人の女性はあきらめなかった。25 節「しかし彼女は来て、イエスの前にひれ伏して言った。「主よ、私をお助けください。」

主イエス様の反応は、沈黙どころか拒否的にさえ映る。26 節「すると、イエスは答えられた。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」 イエス様は、ご自分がイスラエルのために来た、と言う。「子どもたち」とは、イスラエルの民のことで、主なる神様の豊かな祝福を受け継ぐ特権を持っていた。「パン」はイエス様が与える御ことばと力ある業のこと。ここで「小犬」とは、ペットのことで「異邦人」のことを指している。イスラエルの民が受けるべき神の祝福を、異邦人に与えることは悪いことだ、ということだ。主イエス様の宣教は、当初はユダヤ人に向けられて開始されていた。それでも彼女は食いが下がるように、主に近づいていく。

27 節「しかし、彼女は言った。「主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」

彼女は、イエス様のことを救い主、メシヤ、キリストであると認めて、ひたすらに憐れみを求めた。従順に謙って、「主よ、私をお助けください。」と主イエス様の御前でひれ伏し礼拝を捧げた。主の御前にあって、心砕かれた者、床に頭を擦り付けるほどにひれ伏す者に、主は大きく関心を寄せて、主の御力を注いで下さるのだ。もっともっと主に近づいて行こう。